

A—46 発育期における摂食異常，殊に食欲不振について

日女大家政 ○宮原千穂子
武藤 静子

1. 最近，子供の肥満に対する関心が高まっている一方，子供の小食あるいは食欲不振に関する訴えもあとをたたない。これは発育期の栄養上無視出来ない現象である。著者の1人は，1964年，乳幼児の食欲不振に関する調査成績を発表したが1964年には更にその調査を学童中高校生徒にまで広げたのでその結果を報告する。

2. 対象は，東京，長野，東北，四国の四地域の幼稚園，小学1年及び6年，中学3年，高校3年の学童，生徒計3001名（男1452，女1549）で幼児および小学1年児は母親による記入の質問紙法，それ以上は対象者自身の記録による質問紙法を用いた。

3. 乳児期，離乳期および現在の3時期中「食べなくて困る」問題は離乳期に最も高く，殊に東京地区の幼児に多い。また，幼，小，中，高のそれぞれ現時点で比較すると，長野，東北，四国では何れも高校3年に食欲不振が急増している事が注目される。乳児期に全く問題のなかった772例中，231名は現在，食欲不振の訴えをもち，また，逆に乳児期に問題のあった410例中，329名は現在問題解消の形である。従って両時期通じて問題のなかったものは541名，両時期通じて問題のあったものは81名となる。この両群の間には身長，体重，運動の活発さ，罹患状態，虫歯，睡眠，疲れ方などに相異がみられる。